

# 初期中英語 the 'Wooing Group' の Word Pairs の用法とその特徴

## A Study of the Uses and Characteristics of Word Pairs in the 'Wooing Group' from Alliterative, Etymological and Semantic Viewpoints

谷 明 信\*  
Akinobu TANI

This study investigated and described, from alliterative, etymological and semantic viewpoints, the word pairs occurring in the 'Wooing Group' works in Early Middle English. Through the analysis, it identified some aspects of this group's phraseological characteristics: 1) the use of word pairs in 'Wooing Group' is to emphasize moral ideas pertaining to Jesus' virtue, his passion and the horribleness of this world; 2) the 'Wooing Group' bears some similarity with *Ancrene Riwe* or *Ancrene Wisse* in the uses of word pairs.

キーワード：ワードペア、The 'Wooing Group'、初期中英語、言葉遣い

Key words: Word Pairs, The 'Wooing Group', Early Middle English, phraseology

### 1. はじめに

#### 1. 1 研究の目的

初期中英語の重要な散文作品で、英語散文の連続性の問題との関係から重要視されてきた作品として、*Ancrene Wisse* (AW)、The 'Katherine Group' (KG)がある。この2作品は言語的に類似していることが知られている。これらのうちKGに関して、筆者は既にTani(2000)と谷(2001)で、その作品群中の聖女伝作品群The 'Katherine Group' Lives (KGL)のword pairsを調査し、それを手がかりに *A Thesaurus of Old English*が初期中英語に有用であるのかを検証した。

これら2作品AW、KGには言語的に類似しているとされる作品群がもう一つある：The 'Wooing Group' (WG)である。

本研究の目的は、初期中英語の重要な散文作品群であるWGに生起するワードペア(word pairs)を1) 頻度、2) 頭韻、3) 品詞、4) 語源、5) ワードペアが説明的かどうか、6) 構成要素間の意味関係、7) その意味分野 の観点から調査・記述することである。さらに、これを通して、WGのワードペアの特質を同定する。そして、言葉遣い(phraseology)あるいは文体(style)の観点から、AWやKGのような初期中英語の他の作品との比較を行う。

#### 1. 2 本研究の対象テキストとその特徴

本研究の対象は、*Ureisun of ure Louerde*, *Lofsong of ure Lefdi*, *Lofsong of ure Louerdi*, *Ureisun of God Almihti*, *Wohunge of ure Lauerd* の4作品であるが、その言語、内容、書き方の点で密接に関係していることから、the 'Wooing Group' と呼ばれる。この作品群は、13世紀初頭に信仰心篤い女性のために書かれ、天の婿と聖なる教

会・人間の魂の神秘的な結婚という伝統から派生したものである。WGは、AWとKGの言語、AB languageに基づいている(Thompson, lix)。また、WGはKGに見られる“Rhythmic, alliterative prose”の伝統に属している(Thompson, xxiv)。

本研究での使用テキストはThompson(1958)で、その略号に従い(p.51)、引用の際には作品名は以下のように略す<sup>1</sup>：

L: *Ureisun of ure Louerde*

NLe: *Lofsong of ure Lefdi*

NLo: *Lofsong of ure Louerdi*

NU: *Ureisun of God Almihti*

W: *Wohunge of ure Lauerd*

### 2. Word Pairsとその先行研究について

ワードペア(word pairs)は別名バイノミアル(binomials)やダブルット(doublets)と称されることもあるが、*and* や *or* や *nor* などの接続詞により結合された、同一の統語位置を占める2語である。現代英語の例として、*time and tide*、*wear and tear*、*body and soul*のようなものがある。

これらのワードペアに関してはさまざまな研究がなされているが、その中でも特に重要なものとして、古英語・初期中英語の散文作品を対象としたKoskenniemi(1968)がある。Koskenniemi(1968: p.11-12)はワードペアとして、

1) 2語から成る通常のワードペア：

and sona aras turh eall hal and gesund

(*The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History*, pp.178-9)

\*兵庫教育大学第2部(言語系教育講座)

2) 3語以上から構成される

her syndan ryperas & reaferas & woroldstruderass  
(*Sermo Lupi ad Anglos*, 1.171)

3) 一語とその同義的な句から成るワードペア:

wið al þet ich i world hah & i wald habbe (*Marg.* 10.13)

の3種類を対象としている。本研究では、この3種のワードペアのうち、特に1)の2語から成るワードペアに焦点を置き、2)の3語から構成されるワードペアは必要に応じて取り扱い、3)については対象外とする。

3. WGに生起するWord Pairsの分析

3. 1 頻度

さまざまな作品中でのワードペアの正確な生起割合は、現在まであまり調査されていない。作品中での大まかな生起割合に関しては、Koskenniemi(1968: p.68)がいくつかの作品の刊行本のページ数とワードペアの生起度数から算出している。もちろん、刊行本の文字ポイントの違いなどにより、このような数字がどの程度信頼できるかは明らかではない。しかし、テキスト全体の語数に対するワードペアの割合を算出した調査結果がない現在、比較のために本研究でもWGのワードペアについて同様の調査を行った。その結果を、Koskenniemi(1968:p.68)の調査結果とともに併記し、表1とした:

表1: ワードペアの1ページあたりの生起度数

作品	1頁あたりの頻度数
<i>Bede</i>	1.5
<i>Ancrene Riwele</i>	1.3
<i>Ancrene Wisse</i>	0.8
<i>St. Marherete</i>	4.4
WG	3.9

Koskenniemi(1968:p.68)は*Ancrene Riwele* (AR)と*Ancrene Wisse* (AW)でのワードペアの頻度について、次のように指摘している:

With the exception of these two texts (*i.e. Bede and St. Marherete*), however, the average frequency of word pairs in *Acnr. R.* and *Ancr. W.* is higher than in any other work contained in the present material.

この指摘と表1を考慮すると、ワードペアの使用頻度に関して、WGはARやAWとはかなり相違があり、WGでのワードペアの生起の割合は顕著に高く、その点で*St. Marherete* (SM)に類似していると言えよう。ただし、WGにはLとNu、NLoとNleという、2種類のほぼ同内容のテキストが含まれていることも勘案する必要はあるが、各作品毎に計算してもWG全体の上記の頻度はそれほど変異がない。

3. 2 頭韻

Koskenniemi(1968)は、ワードペアに最も大きな影響を与える音声上の要因が頭韻であること、その調査したワードペア全939例中358例すなわち約38%が頭韻を踏んでいる事を指摘し(p.88)、また、Aelfric's *Homilies*やAR、AWやSMのようにWGと密接な関係がある作品群での頭韻ワードペアの割合の調査を行った(p.62, 68)。

本研究では、WGに生起する全ワードペア中での頭韻ワードペアの割合を調査し、その結果にKoskenniemi(1968)の結果を併記し、表2とした:

表2: WG及び、関係の深い作品中での頭韻ワードペアの割合

WG	40.7%(59/145例)
Aelfric's <i>Homilies</i>	c. 50%
AR	c. 36%
AW	c. 45%
SM	c. 92%
Koskenniemi全体	c. 38%

ARを除いたWGと関係の深い作品では、頭韻ワードペアの割合が、Koskenniemiが調査した古英語・初期中英語散文作品での平均よりも高い事が分かる。しかしながら、WG自体での頭韻ワードペアの割合は、Koskenniemiの調査対象での平均よりわずかに高いだけで、WGのワードペアにおける頭韻使用に関しては特徴があるとは言えない。ただ、ARとAWの中間の比率であることは、注目に値するであろう。

このように、KGと同様に“rhythmic, alliterative prose”と属していると言われながらも、頭韻ワードペア自体の頻度がSMなどと比べてかなり低いことから、WGでのワードペア使用の目的が頭韻のためでないことは明らかである。

なお、3語から構成されるワードペア、別名tripletsは、今回24例見られたが、そのうち次の2例のみが3つの構成語とも頭韻を踏んでいた:

þu ert so leoflich so louelich & so lufsum (NU 8-9)

“so liefly, so lovely & so lovesome”

swa leoflic .swa leoflic and swa lufsum (L 7-8)

“so liefly, so liefly & so lovesome”

これら以外の多くの場合、3つの構成語のうち、2語のみが頭韻を踏んで、残り1語が非頭韻になる:

ich bidde & biseche te & halsi (R 28)

“bid & beseech . . . & halse”

tu mihtes . . . make hit hwit & schene & semlike

iþi sihte (W400)

“white & sheen & seemly”

つまり、tripletsの場合は、2語からなるdoubletsよりは強調の度合いは強まるが、頭韻は崩れる傾向にある。

さて、2語からなる通常のワードペアの頭韻・非頭韻と、ワードペアの構成要素の語源について、調査した。その結果を表3とした：

表3：WGワードペアの頭韻と構成要素の語源

	頭韻	非頭韻
OE+OE	55(93.2%)	68(79.1%)
それ以外	4(6.8%)	18(20.9%)
計	59	86

WGの頭韻を踏んでいるワードペア59例中、55例は古英語(OE)の要素のみから構成されており、古フランス語(OF)からの借用語を含んでいるものは次の4例のみで、6.8%を占める：

- buruh de grace & te æoue of þe holi goste* (NLo 020)  
 “the grace & the give”  
 hu ha . . . dintede unrideli o rug & schuldres & bifore  
 þe princes *buffeted & beten* (W 472-3)  
 “buffeted & beat”  
 A nu driuen ha him up *wið swepes & wið schurges*  
 “with swepes & with scourges” (W 506-7)  
*þi bitter pine & passiun* . ti derue deað o rode  
 “thy bitter pine & passion” (W 266)

下線を施したものがOF借用語であるが、OED2によれば、*grace* の初出はLambeth Homilies(1175)、*buffeted* “buffet” の初出例はAncrene Riwele(1225)で、*schurges* “scourge” はSt. Katherine(1225)、*passiun* “passion” はLambeth Homilies(1175)である。一方、頭韻を踏んでいないワードペア86例中OEの要素のみから成る用例は68例で79.1%、OE以外の要素を含んでいる例が18例で20.9%を占める。つまり、頭韻ワードペアのみならず、非頭韻ワードペアにおいても、本来語の割合が非常に高いことが分かる。

最後に、WGでの頭韻ワードペアの59例中で、頭韻を踏んでいる音の頻度の高いものは以下の通りである：

表4：WGでの頭韻ワードペアの頭韻音

l	9(10.5%)
s	14(23.7%)
w	11(18.6%)

これらの高頻度の頭韻音はKGLのそれと若干の頻度の違いはあるが、重複している。WGの調査に直接関係するかは不明であるが、ワードペアでのこれらの頭韻音を調査すれば、初期中英語において、どのような音で始まる

類義語や反意語が多いかを示す手がかりとなろう。

### 3. 3 品詞

ここでは、WGに生起するワードペアの品詞を調査し、現代英語でのワードペアを調査したGustafson(1975: p.62)の結果と比較する。

表5：WGおよび現代英語のワードペアの品詞

品詞 \ 作品	WG	Gustafson(1975)
N	81(55.9%)	54(57%)
Adj	32(22.1%)	10(14%)
V	31(21.4%)	27(20%)
Adv		9( 9%)
Aux	1( 0.6%)	

WGにおいても現代英語と同じように、名詞のワードペアが最も多く、形容詞・動詞がそれに続くことがわかる。ただし、Tani(2000)の調査により、古英語辞書Clark-Hallにおいては現代英語にも多く残存する副詞のワードペアが多く収録されていること、KGLにおいても副詞のワードペアが12例生起し、全体中2.1%を占めることを調査結果として得た。初期中英語作品において、副詞のワードペアの頻度が低いにしても、副詞のワードペアがWGで全く見られないことは、WGの作品群のワードペアの特徴である可能性がある。

### 3. 4 語源的構成

WGに現れるワードペアの構成要素の語源を、OED2により調査・分類した結果を表6とした。比較参照の便に、Koskeniemi(1975: p.215)による後期中英語Margery Kempeのワードペアの語源調査の結果も掲載した：

表6：ワードペア構成要素の語源

1st word	2nd word	WG	Margery Kempe
Anglo-Saxon	AngloSaxon	119(82.1%)	86(32.8%)
Romance	Romance	3( 2.1%)	52(19.8%)
Anglo-Saxon	Romance	9( 6.2%)	65(24.8%)
Romance	Anglo-Saxon	10( 6.9%)	47(17.9%)
Romance	ME<OE+ON	2( 1.4%)	
Romance	Old Norse		2( 0.8%)
Old Norse	Old Norse	1( 0.7%)	
Old Norse	Anglo-Saxon	1( 0.7%)	4( 1.5%)
Old Norse	Romance		3( 1.2%)
Anglo-Saxon	Old Norse		3( 1.1%)
Obscure	Anglo-Saxon	2( 1.4%)	

WGでは、本来語の構成要素のみから成るワードペアが全体の82.1%を占めている。この点は、KGLにおいても、本来語のみから成るワードペアの割合が89.2%であることから、本来語の頻度の高さの点で両作品は類似していると言える (Tani(2000): § 3.3.1)。WGでの本来語の高い比率は、KGL同様に、この作品群でのワードペア使用の目的が理解困難なOF系借用語を説明するためではないということを示している。

しかしながら、語源的観点からで特に興味深いのは、やはりOF借用語である。表6中でRomanceと分類したものの中には、古英語期のラテン語からの借用語4例も含めたので、それらを除いたOF借用語の構成要素を含んだ例は20例、総語数22語、延べ語数16語あり (ただし、派生関係にある語や重複したものを1語とカウントすると、12語になる)、全体の13.8%を占める。このOF借用語の比率は、興味深いことに、AWとARのワードペア中のOF借用語の比率10.6%と19.9%の中間に属する (cf. Koskeniemi (1968: p.70)。これらOF借用語を含んだワードペア20例中、10例全11語 (重複を含む) は、ARが初出となるOF借用語である<sup>2</sup>。:

hwat heorte mai hit þenche for sorhe & for reowðe  
of alle þa bufettes & ta bali duntas (W 461-2)  
“all the buffets and the bale dints”  
þu wið noblesce & hendeleic (W 256)  
“nobless and hendelaik”  
Sume freedom & largesce (W 19)  
“freedom and largesse”  
Ah noble men & gentile & of heh burðe ofte  
winnen luue lihtliche cheape (W 160)  
“noble . . . and gentle”

OED2によれば、これら下線のOF借用語は、ARにおいて初めて使用された。ARとWGとの作成年代の時間差から、これらの借用語は英語に借入されて間もないにもかかわらず、使用されていた。このことを考慮すると、AB language とまで主張せずとも、何らかの伝統なり、密接な関係が、WGとARの背景にはあったと考えても良いのではなかろうか。この点で、興味深いのは最後の例の *noble men & gentile* というワードペアである。これはARでも用いられているものである (Koskeniemi 1968: 143)。本例では “noble . . . and gentle” の両方の意義を包括する、*of heh burðe* という説明的な句が併置されているものの、まだ英語に十分に同化されていないと考えられるARと共通の借用語のワードペアを用いた事は、13世紀初頭のWest Midlandの文化圏の文学伝統の強さを示していると言えるのではなかろうか<sup>3</sup>。

なお、先にKGLとWGの本来語のワードペアの高い頻

度が共通することを指摘したが、WGは、OF系を含むワードペアがKGLと比較して多い点で異なっている： OF系借用語が、WGでは145例中20例13.8%であるのに対し、KGLでは564例中22例3.9%である。また、WGは、ON系を含むワードペアがKGLと比較して少ない点でも異なっている： ON系借用語が、WGでは145例中2例(ただし、接尾辞が入っている2例を含めず) 1.4%であるのに対し、KGLでは564例中30例5.3%である (cf. Tani (2000): p.34)。

この点ではまた、WGは200年ほど後のMargery Kempとは大きな差があると言える。Margery Kempeでは、ロマンス系の借用語が全体の63.3%を占めるので、中英語中に如何にOF系借用語が増加したかが同われるが、Koskeniemi(1975)はMargery KempeでのOF系借用語を含むワードペアが説明的かを解明していないので、この点に関しては再調査の必要があろう。

### 3.5 WGのword pairsは説明的か？

WG作品群全体でのワードペア使用の主目的が、理解困難なOF系借用語のためではないということは既に3.4で論じた。しかし、個々の用例について、この見解は当てはまるであろうか。

同義的なワードペアの使用に関しては、理解の困難な借用語を説明するために使用されたと論じるJespersenのような学者もいる (cf. Koskeniemi 1968: pp.13-17)。従って、ここでは、古フランス語からの借用語を含む個々のワードペアを検討する。

本研究の全データ145例中、古フランス語からの借用語を含むワードペアは17例11.7%を占める。これらを構成要素の語源から分類し、用例を挙げる：

[OF + OF] 2例

alle þ clenli for þi luue mesaise & pouerte wilfulliche  
þolien. “misuse & poverty” (W 355-6)

[OF + OE] 6例

Inoh were pouerte & schome wiþ uten odre pines  
“poverty & shame” (W 440)

A mi deorewurðe durð swa gentile & swa hende  
“gentle & hende” (W 189)

[OE + OF] 7例

tu wult hauei me to lefmon & to spuse (W 293)  
“leman & spouse”

A nu driuen ha him up wið swepes & wið schurges  
“with swepe & with scourge” (W 506-7)

[その他]：[ME(<OE)+OF]1例、[OF + ME(<OE+ON)]  
2例

セクション3.4で既に考察したが、ARで初出のOF借用語が9例10語、SMとSKからの例が2例、また、Trinity College Homiliesからの例が5例である。これらの作品は

全て13世紀初頭の作品で、WGとは十年単位でしか時間差がない。OF借用語全20例中、17例が本来語の構成要素と共起していること、また、OF借用語20例中、意味関係が同義または類義的なものが13例であることも併せて考慮すると、これら個々のOF借用語の例に関しては、説明的であった可能性は大きいと言えよう。ただし、WGでのワードペア使用の主目的が理解困難なOF系語彙を説明することではないことは、OF系ワードペア17例が全体の11.7%と圧倒的に少ないことから、明らかである(セクション3、4を参照のこと)。

### 3. 6 構成要素間の意味関係

Koskenniemi (1968: p.90-) は、ワードペアの構成要素間の意味関係として、以下の4つを設定している: 1) 同義あるいは類義 (“synonymous”), 2) 換喩、つまり意味の隣接による結びつきという意味関係 (“metonymy”, “associated by contiguity of meaning”), 3) 相補的または反意 (“complementary or antonymous”), 4) 列挙 (“enumerative”). WGからそれぞれの意味関係の用例を以下に挙げる:

- 1) 同義的:
 

*eorþlice louo & heouenliche* (L 024)  
“earthly . . . and heavenly”
- 2) 換喩:
 

*his þet wrohte & welt al þet ischeapen is* (NU 140)  
“wrought and wield”
- 3) 相補的・反意的:
 

*þus ich am lodliche i hurt ine licame & ine soule*  
“in licham and in soul” (NLe 32)
- 4) 列挙:
 

*bi his spotlung & bufettung* (NLe 50)  
“spatling and buffeting”

WGでのワードペアをこの分類により、分類し頻度を調査した。その結果を、Koskenniemi (1975: p.213) が Margery Kempe について算出した結果と併せて、表7とした:

表7: ワードペア構成要素間の意味関係

作品 \ 意味関係	WG	Margery Kempe
syn	85(58.6%)	159(60.7%)
met	33(22.8%)	77(29.4%)
comp/ant	22(15.1%)	26( 9.9%)
enum	5( 3.5%)	

この表を見る限り、ワードペアの構成要素間の意味関係

からは、Margery Kempeと比較して、WGの特徴は解明できない。

### 3. 7 ワードペアの意味分野

Koskenniemi(1968)は“Semantic Categories of the Word Pairs” (pp.96-8)の中で、具体的な事物を指示する例は少なく、ほとんどの例は抽象的な分野を指示する例であることを指摘、その上で、ワードペアの意味分野を8つのsemantic categoriesに分けて論じている。その分野とは、1. Religion 2. Instruction and other intellectual activities 3. Moral Values 4. Emotions and feelings 5. War and peace 6. Administration (civil and ecclesiastical) 7. Communication by speech and writing 8. Spatial and temporal relationsである。この分類に従って、WGのワードペアを実際に分類するのは困難であるが、敢えて分類すると、上記分類の1. 宗教、3. 道徳的価値、4. 感情が大多数である。しかし、このような分類よりは、Koskenniemi(1968: pp.62-66)自身がSMのワードペアについて行った分析のように、むしろ主題との関係でワードペアの意味分野を考えた方が、WGでは有用であると考えられる。

WGの主題は、筆者のイエスやマリアへの懇願である。実際、1) イエス・マリアへの賞賛・祈り・畏怖、2) イエスの受難、また、3) 天国と引き比べての現世・人間の罪深さ・苦しみ・酷さなどを指し示すワードペアが多いと言えよう:

- [イエス・マリアへの賞賛・祈り・畏怖]
- for hwam þu hauest þin edinesse & ti muchele heh schipe* (L 111-2)  
“your eadiness and your much highship”
- a iesu þin edmodness & þi muchele milce* (NU 056-7)  
“your edmodness & your much milce”
- tu þ al þe world fore mihte drede & diuere* (W 530-4)  
“dread & diver”
- [イエスの受難]
- þi bittre pine & passiun . þi derue deað o rode* (W 266)  
“pine & passion”
- Siðen ætte buffetet & todunet i þe heaued wið þe red æerde* (W 485-6)  
“buffeted & to-duned”
- [現世の苦しみ・酷さ]
- þe water þ te world wesch of sake & of sunne* (W 546)  
“of sake & of sin”
- cunfort on eorþe þis fikel and fals* (L 28)  
“fickle and false”

これらの分野でのワードペアが多いことから、WGでのワードペア使用は、主題との関係が密接である事が分かる。この点は、Héraucourt(1939)の主張、つまり、チャーサー

のワードペアの多くは道徳的観念を指し示すと言う主張に基づいて、Koskenniemi (1968)がさまざまな作品群での道徳的観念とワードペアの関係を指摘しているが、この主張を支持していると言える。また、上記のような分野でのワードペアの頻度の高さは、作品の主題と密接に関係することから、WGのワードペアの主な機能が主題内容を強調することである事も示している。

#### 4. 結論

本研究ではWGのワードペアを、1. 頻度、2. 頭韻、3. 品詞、4. 構成要素の語源的構成、5. ワードペアが説明的かどうか、6. 構成要素間の意味関係、7. ワードペアの意味分野、の7つの観点から調査・記述した。その結果から、WGのワードペアの特質として、次の点が解明された：

- 1) ワードペア使用は頭韻が目的ではない
- 2) OF承借用語を含むワードペアでは、理解困難な語の説明を行っている場合が多いが、WGのワードペア全体では、理解困難な語の説明がワードペア使用の主目的ではない
- 3) ワードペア使用は主題内容を強調するのが主目的である
- 4) 強調したい意味分野は、(1) イエス・マリアへの賞賛・祈り・畏怖、(2) イエスの受難、また、(3) 天国と引き比べての現世・人間の罪深さ・苦しみ・酷さなどである。
- 5) 頭韻使用の割合、OF借用語の全体での比率、共通のOF借用語などの点から、ワードペア使用に関して、WGはAWあるいはARと親近性がかなり強いと言える。また、この点については、13世紀初頭のWest Midlandの文学的伝統の強さを伺わせる。

本研究では、以上のようにWGのワードペア使用を記述し、特質を明らかにした。しかしながら、KGやAWやARとの比較の際には、KGLを除いては、Koskenniemi (1968)のデータに依存したので、比較調査が制約される場合があった。言葉遣い (phraseology) の観点からこれらの作品の特質を明らかにするために、AWやARや *Sawles Warde*, *Hali Medenhad* の未調査の作品を調査することをこれからの課題としたい。

#### 注

1. 引用の際には、ワードペアをイタリックにし、議論と関わる語には下線を施した。さらに、ワードペアには語注として、引用の直後にOED2の見出し語の形で、ワードペアのパラフレーズを施した。
2. ここではARと記述したが、語源分類はOED2の記述に従っている。OED2ではAWからの引用は2例のみで、そ

れも補遺で一例が追加されたのみで、ARからの引用がほとんどであり、AWと区別をしていず、引用テキスト上の問題があるので、この点はARと断言できるか問題がある。

3. なお、AR以外にもSMや*St. Katherine*が初出例となる2例が、OF借用語20例中には含まれている。ちなみに、*noble*や*gentil*が多く生起する14世紀の*The Canterbury Tales*には、*noble and gentil* というワードペアの用例は見られないが、次のように近接して生起する例が1例見られた：

For he was boren of a *gentil* hous / And hadde his  
eldres *noble and vertuous*, (WB 1153-4)

#### 一次資料

- Morris, Richard ed. *Old English Homilies and Homiletic Treatises of Twelfth and Thirteenth Centuries*. EETS o.s. 29, 34. NY: Greenwood Press. 1969.
- Thompson, W. Meredith ed. *De Wohunge of Ure Lauerd*. EETS o.s. 241. London: Oxford UP. 1958.

#### 参考文献

- Gustafsson, Marita. *Binomial Expressions in Present-Day English: A Syntactic and Semantic Study*. Turku: Turun Yliopisto, 1975.
- Heraucourt, Will. "Das Hendyadiyoin als Mittel zur Hervorhebung des Werhaften bei Chacuer." *Englische Studien* 73(1939). pp.190-201.
- Koskenniemi, Inna. *Repetitive Word Pairs in Old and Early Middle English Prose*. Turku: Turun Yliopisto, 1968.
- 一. "On the use of repetitive word pairs and related Patterns in *The Book of Margery Kempe*." In H. Ringbom et. al. eds. *Style and Text: Studies Presented to Nils Erik Enkvist*. Stockholm: Sprakforlaget Skriptor AB. 1975. pp.212-218.
- Tani, Akinobu. "Usability of A *Thesaurus of Old English* for Early Middle English With Special Reference to Word Pairs in the 'Katherine Group'." Handout The Sixteenth Congress of The Japan Society for Medieval English Studies at Kansai University, Osaka. Dec. 10, 2000.
- 谷明信. 「A *Thesaurus of Old English*は初期中英語に有用か?—The 'Katherine Group'に現れたWord Pairsの観点から—」『兵庫教育大学紀要』第22巻第2分冊(2002). pp.23-30.